

# ネブラスカって、どこですか？

令和2年3月

沼尾 利郎

## 1 ミッドウェストの遙かな空



図1

1990年代のはじめに、2年間ほど米国の中西部で暮らしました。ネブラスカ州オマハという街にある大学に留学したのですが、ネブラスカは米国の中央に位置し(図1)、オマハはシカゴとデンバーのほぼ中間にあります。市街地を抜けるとトウモロコシ畑と牧草地がどこまでも続く典型的な中西部(Mid West)の地方都市であり、ミズーリ川の河畔に開けたこの街は豊かな水と緑に恵まれ、西部への玄関口(Gate City)として発展してきました。ネブラスカは牛肉・豚肉・トウモロコシ・大豆の生産量が全米一であり、農作と牧畜が経済の柱である米国有数の農業州です。

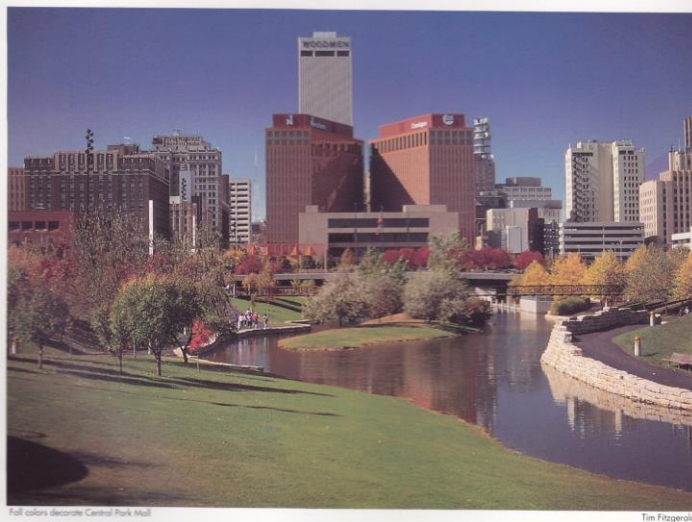


写真1

オマハという語はネイティブアメリカンの言葉で「断崖絶壁の上に住む民」「風や流れに逆らって進む人」と諸説の意味があり、古いものが新しく生まれ変わるような土地柄です(写真1)。東西の大都市とは異なり物価は安く治安も良かったため、家族で住むにはとても暮らしやすい土地でした。住民は圧倒的に白人が多く、黒人やアジア系・ヒスパニック系は少ないため、どこへ行っても自分たちのアイデンティティーを意識することになりました。90年代初頭といえば日本ではバブル期の余韻が残っていた時代であり、2年ほど

の滞米期間中には湾岸戦争やソ連崩壊、真珠湾攻撃 50 周年、ロス暴動などの大事件が次々と起きて、在留邦人としての緊張感や苦労も多少は味わいました。しかし若い時の外国暮らしは家族と私にとって大変貴重な経験であり、帰国後 30 年近く経過した現在でも、ミッドウェストの遥かな空が鮮やかに思い出されます(写真2)。



写真2

## 2 海外留学者の減少

現在では臨床留学も珍しくありませんが、私が渡米した 90 年代は研究目的の留学が大半でした。研究室には米国人を中心とした臨床研究チームの他に、カナダ・メキシコ・日本・中国・ベトナム・インド・フランス・アフリカからのスタッフによる基礎研究チームがあり、週1~2回のミーティングの他に研究者同士の交流も活発で、学内のオープンセミナーもよく開催されていました(写真2)。



写真3

近年では外国へ留学する日本人が大幅に減少しており、ピークだった 2004 年の 8 万 3000 人から 2016 年には約 5 万 6000 人と大きく減少しています(12 年間で 32% 減少)。留学者数が減った理由として「若者の内向き志向」「経済的な理由(留学費用の高騰)」「就職活動への支障」などが指摘されていますが、最大の理由は少子化のようです。すなわち 2004 年における 20 代の人口が 1650 万人、これに対して 2016 年は 1250 万人(約 24% 減少)なのですから、若者人口が減れば留學生が減るのも仕方ないのでしょう。

しかし、若い時に海外で生活することで、勉強や研究以外にも多くのものが得られます。多様な人と出会い多様な価値観に戸惑いながらも、自分の視野が広がるだけでなく

人生の選択肢も増やしてくれます。その時はつらかった苦労も脳のポジティブな復元力(レジリエンス)でいつかは楽しい思い出に変わるので、もし機会があればぜひ留学することを医学生や研修医たちに勧めています。

### 3 中西部の暮らし

オマハは蒸し暑い夏(40°C以上)と乾燥した厳しい寒さの冬(-20°C以下)に特徴づけられる典型的な内陸型気候であり、真夏のような天気の一週間後に大雪が降ったりするので、とにかく油断が出来ません。北緯41度というと日本では函館(北海道)と同じ位置なので、冬の寒さも納得できました。名物の竜巻にも何度か襲われて、地下室の必要性がよく分かりました。

市内には「世界一の動物園」(2014年)にも選ばれた「ヘンリードリー動物園」があり(東京ドーム11個分の広さ)、中でも「砂漠ドーム」と「熱帯雨林」は北米最大級といわれる規模で、まだ小さかった子供たちは大喜びでした。

どんな土地でも、そこに住んでみないとわからないことがあります。観光客として訪問するのは異なり、暮らしてみても初めて見えてくるものがたくさんありました。我々が知り合った人たちは皆とても親切であり、4歳の長女はPreschool(幼稚園)で、妻と1歳の長男は教会の母親サークルで温かく迎えられ、多くの友人ができました(長女は3年前に同級生の結婚式に参列しました)。しかしその一方で米国の苦悩の深さ(人種問題、経済格差など)を改めて知り、米国社会は多民族が相互理解の下で1つにまとまる「人種のつぼ」ではなく、共存しても融合しない「サラダボウル」であることを深く実感しました。現在のトランプ政権を支持する強固な保守層は、その当時から存在していたのですね。

### 4 ネブラスカとのご縁

私が勤務する国立病院機構宇都宮病院は結核や非結核性抗酸菌症の患者さんが多いのですが、最近我々は非常にまれな抗酸菌症(本邦第1例)を経験し国際学会(ATIS)で報告することになりました。それはマイコバクテリウム・ネブラスケンシス(Mycobacterium Nebraskense)という名の抗酸菌であり、日本初というより北米大陸以外で初の報告例です。土地の名前がついていますが風土病という訳ではなく、この菌が最初に発見された土地名が菌種に付けられています。抗酸菌は現在200種ほど報告されており、解析技術の進歩により新種がどんどん発見されているのです。

ネブラスカに留学した私がネブラスカに由来する希少疾患に遭遇したのも、何かのご縁かもしれません。期待したほど英語は上達せず研究もずいぶん失敗しましたが、それでもやはりあの2年間は家族と私にとって大変貴重な経験であり、fruitfulなものでした。旅行で訪れた国立公園の雄大な風景もさることながら(写真4)、住宅近くに広がる美しい自然とそこで出会った様々な人たち、そして何より「ゆとりのある生活の豊かさ」を知ることが出来たのは留学のもう1つの収穫であったと、今あらためて思っています。



写真4

(栢医新聞 2020年3月5日号 掲載)